

新潟大学における 学士課程教育構築と その実質化への取組

新潟大学 副学長（学務担当）
濱口 哲

新潟大学の学士課程教育のデザイン

旧来型の共通教育と専門教育を廃し、
育成する人材像に即した4年一貫の教育プログラム
(主専攻プログラム)による教育を実現する。

1. 「教育資源」の共通化
教員組織と教育組織の分離
授業科目の共通化と分野・水準コードの付与
2. 人材育成目標に即した教育プログラムの構築
主専攻プログラムの整備
3. 学生の学習成果の実質化
新潟大学学士カアセスメントシステム(NBAS)の構築

新潟大学における教員所属組織の変更

<考え方>

- 1) 教育組織と教員人事組織の分離
→→ 教育研究院の設置
- 2) 特定職務に特化した教員の採用
→→ 狭義の「教育・研究」以外の仕事の教員
学長・理事直属組織／共通基盤組織／教育・学生支援機構など
- 3) 人事の一元的な管理体制の確立
→→ 固定的「定員概念」の撤廃

授業科目を全学共通の教育資源化

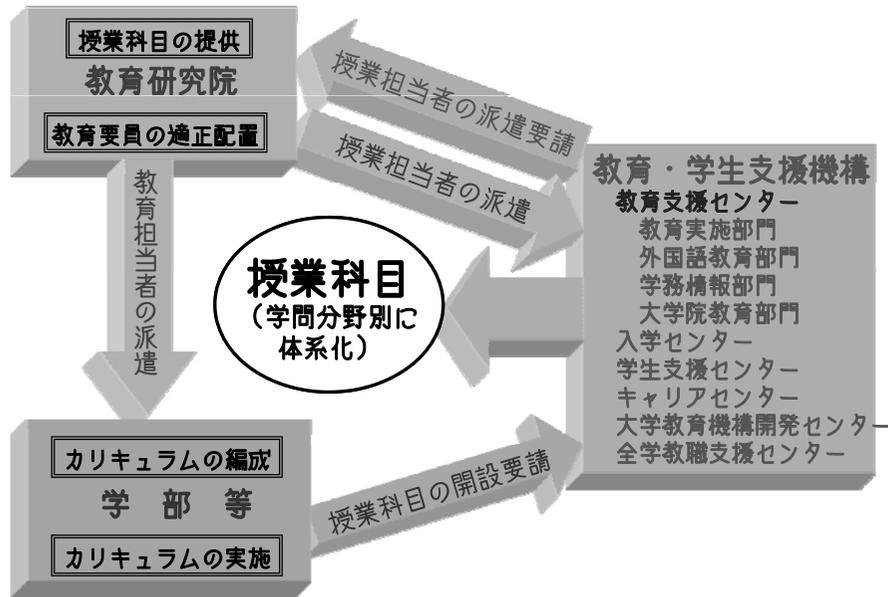
“全学科目化”

全授業科目は原則として全学学生が履修可能
教養科目と専門科目の科目区分の撤廃
・プログラムの二元性の克服
・教養か専門かは、科目の属性ではなく、
プログラムの中での位置づけの問題

分野・水準表示

授業科目に分野と水準を示すコードを付す
“学問分野”の観点で授業内容の正当性を担保

授業科目の全学的開設体制



分野・水準表示法

全授業科目に分野と水準を示すコード

- ① 学生に、授業科目の学問分野と水準を示す
- ② 担当教員に授業科目の”公共性”の確保を要請する
- ☆ 分野は学問分野の区分：科研費の区分に準拠
教育プログラムに即したものではない
- ☆ 水準：内容の積み重ね
大学レベルの授業：3 / 4 / 5の3段階

分野・水準 →→→ 授業科目の達成目標

- ・ 科学研究費の分野・分科に準拠
- ・ 教育プログラム（学部学科）には依らない。

●分野コード表

分 野		分 野		分 野	
10	情報	41	数学	65	農業工学
13	芸術	43	物理学	66	畜産学
14	健康スポーツ	44	地学	70	英語
15	生活科学	46	化学	71	外国語
16	科学社会学	47	応用化学	74	キャリア意識形成
28	哲学	49	工学基礎	75	新潟大学個性化科目
29	文学	50	機械工学	76	大学学習法
30	言語学	51	電気電子工学	77	課題研究
31	史学	52	土木工学	80	基礎医学
32	人文地理学	53	建築学	81	臨床医学
33	文化人類学・民俗学	54	材料工学	82	社会医学
34	法学	55	プロセス工学	85	看護
35	政治学	56	人間工学	86	福祉
36	経済学	57	生物学	87	境界医学
37	経営学	60	農学	90	基礎歯学
38	社会学	61	農芸化学	91	臨床歯学
39	心理学	62	林学	92	社会歯学
40	教育学	64	農業経済	99	その他

授業科目の体系化

〈水準コード〉

1の位の数字		
1	大学学習法など、大学での学習を円滑にするためのもの	大学学習法などの導入教育
2	高等学校との接続を意識した水準（リメディアル）	高校で習うレベルの講義
3	通常の大学の基礎的水準	大学における「普通の」講義 レベル 3 < 4
4	専門の中核的水準	
5	発展的内容の科目で大学院との接続水準	アドバンス・限定的な内容の講義

10の位の数字	
0	全学の学生を受け入れることが可能な科目
1	当該学部（学科）の学生に限られる科目
2	教員免許など資格に関わる科目

2. 人材育成目標に即した教育プログラムの構築

到達目標達成型の教育プログラム

- 主専攻プログラム (平成19～21年)
- 副専攻プログラム (平成16年)

教育資源の全学共通プラットフォーム

- 教育研究院
- 授業科目の全学化

科目区分の撤廃と分野・水準表示法の導入

学部・学科の教育課程の主専攻プログラム化

(学問分野を背景とした「学科」から「人材育成プログラム」へ)

<プログラムの整備>

- 設置目的を明示し、明確な人材養成目標(学習成果)を掲げる。
- その学習成果は、専門・教養を含めた到達目標とする。
- 学生が到達目標に至るための学習方略を明示する。
- プログラムは必要十分な授業科目から構成され、各授業科目と到達目標との関係を明示する。

<プログラム担当教員集団の機能の明確化>

- 担当教員集団がプログラムにおける教育活動について共通意志を持つ。そのための具体的方策(FD活動等)を備える。
- 主専攻プログラムの成果を検証し、プログラムの改革を進める“しくみ”を備える。

「プログラムシラバス」作成作業を通じて、抜本的改革を図る。

プログラムシラバスの内容

- ① プログラムの名称
- ② 取得できる学位
- ③ プログラムの概要と人材育成のねらい
 - ・当該プログラムの優位性、特徴
 - ・プログラムの人材育成のねらい
- ④ 獲得が期待される学習成果および効果
<到達目標(学習成果)の観点>
 - 1) 知識・理解
 - 2) 当該分野固有の能力
 - 3) 汎用的能力
観察および説明が可能な成果・証左を伴うよう具体的に記す
 - 4) 獲得が期待される態度・姿勢
- ⑤ プログラムの履修要件
- ⑥ 到達目標に達するための学習方略・方法
カリキュラム立案と学習方法の基本方針
授業科目リスト(カリキュラムマップ)
- ⑦ 修了認定の基準(基本的考え方、必要単位数)
- ⑧ 教育プログラムの評価と改善のための方策
- ⑨ 担当教員組織とFDポリシー

3. 学生の学習成果の実質化への取組(平成22年度～)

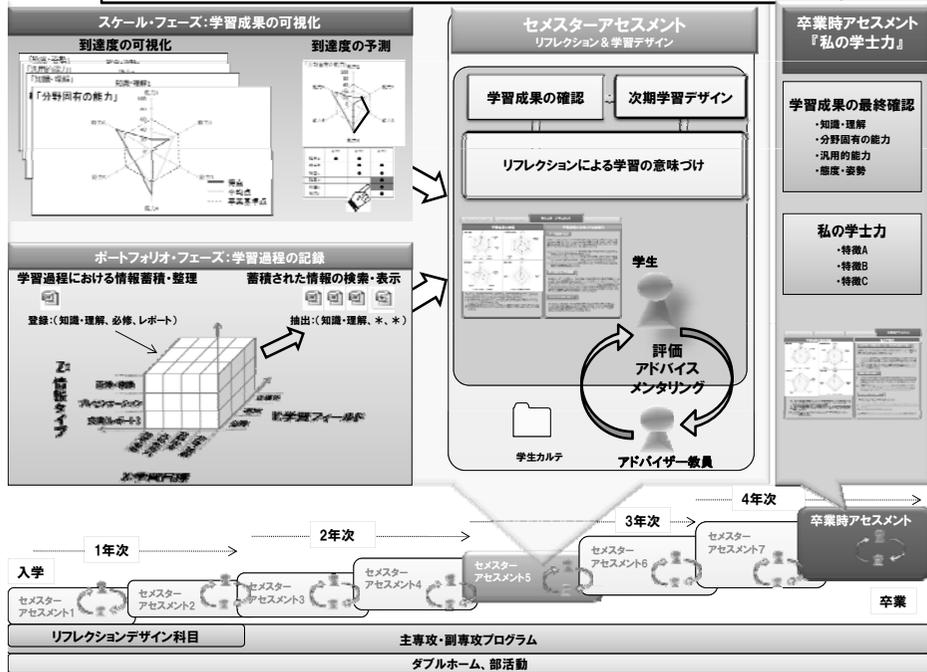
新潟大学学士カアセスメントシステム

(NBAS: Niigata university Bachelor Assessment System)

1. 学習(広義)活動の主体的蓄積 → ポートフォリオ
2. 学習成果(広義)の可視化 → スケールフェーズ
3. 学習成果のリフレクションとその提示
→ セメスターアセスメント/卒業時アセスメント

<開発の目的>

- 学生が自らの学習目標を具体的に知(確認)する。
- 学生が自分の達成状況を把握する。 → 学習目標の調整
→ 履修計画の立案
- 学生が自分の学習成果を社会に表現する。 → 就職活動
→ 学位取得申請?
- 教員(アドバイザー)が学生の状況について学生と共通認識を持つ。
→ 履修に関わる助言
→ 正課外活動についての助言
→ 単位認定するための評価?
- 教育プログラムの到達度を把握する。 → プログラムの評価/改善



スケールフェーズ：成績→重み付け→レーダーチャート

カリキュラムマップ

	知識理解							分野固有の能力					汎用的能力				態度姿勢			成績				
	a)	b)	c)	d)	e)	f)	g)	a)	b)	c)	d)	e)	f)	a)	b)	c)	d)	e)	a)		b)	c)	d)	
食生活論																								80
被服学概論																								
被服環境学																								
住環境学概論																								
住環境科学																								95
ライフデザイン論																								
生活科学セミナーA~G																								
生活科学課題の分析A~G																								85
食品環境科学基礎実験																								
基本調理実習																								
被服学実験実習																								80

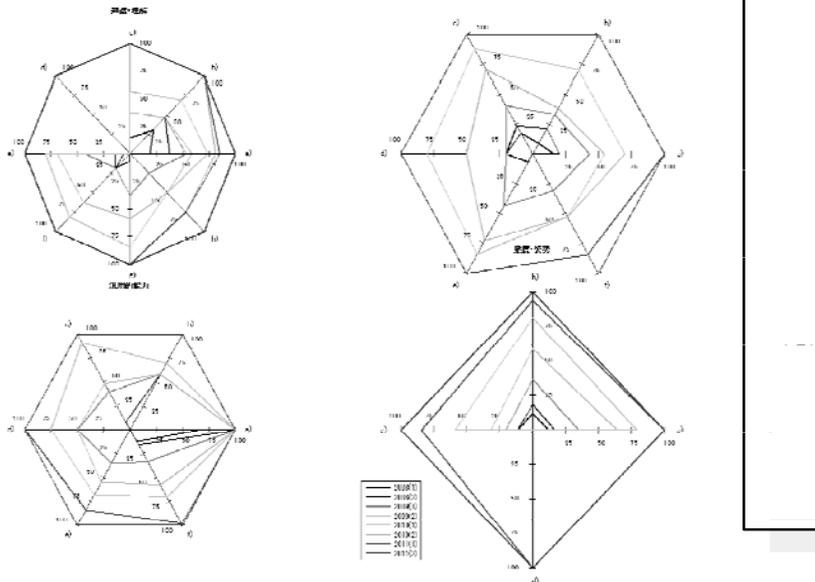
重み付けされたカリキュラムマップ

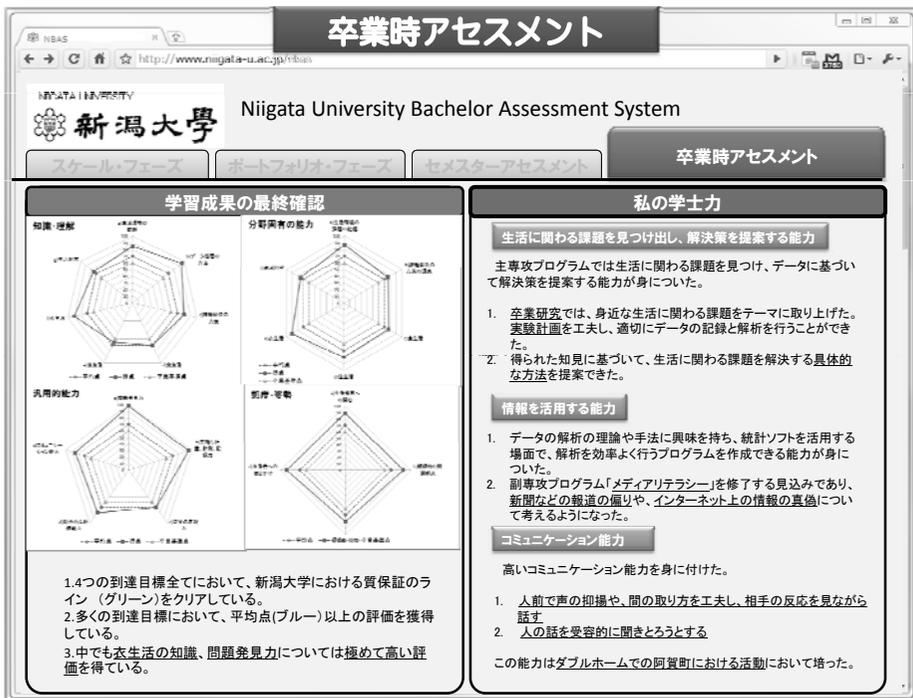
	知識理解							分野固有の能力					汎用的能力				態度姿勢			成績				
	a)	b)	c)	d)	e)	f)	g)	a)	b)	c)	d)	e)	f)	a)	b)	c)	d)	e)	a)		b)	c)	d)	
食生活論		40							20															80
被服学概論			50						40														10	
被服環境学			60						20															
住環境学概論											10												20	
住環境科学											30												10	95
ライフデザイン論														30		10							15	
生活科学セミナーA~G									40														20	
生活科学課題の分析A~G									40														20	85
食品環境科学基礎実験																							15	
基本調理実習																							10	
被服学実験実習																								80

【試行プログラムの例】

学習成果の可視化

$$\text{各到達目標の到達度(レーダー)} = \min \left\{ \frac{\sum \text{重み} \times \text{成績} \times \text{単位数}}{\sum \text{重み} \times 100 \times \text{単位数}} \times 100, 100 \right\}$$





NBAS開発 開発期間：2010(平成22)年～2014(平成26)年

- 2010：基本設計の検討
複数プログラムでの試行
スケールフェーズの重み付けの方法
- 2011：支援システムの仕様の策定
試行
リフレクションデザイン科目の設計
- 2012：システム開発と導入（2013年1月）
- 2013：先行プログラムで導入と運用方法の整備
- 2014：全面的導入

期待される効果

- プログラムの到達目標の見直し(実質化)
- プログラムの構成する授業科目の見直し
- 目標とカリキュラムの乖離の検討

- ▶学生の学習目標の確認と主体化
- ▶学習行動の実質化
- ▶学習成果の確保
- ▶自己肯定できる学生の育成

改革を巡る諸課題

① 教員の意識改革の必要性

意識改革を待てない

←→ 意識改革無しには成果は期待できない。

- システム改革の結果としての意識改革
(プログラムシラバスの作成/カリキュラムマップ
の重み付けという「作業」を通じた変化に期待)

② 学生の主体的学習態度の育成

自ら行う自らの人材育成 (キャリア)意識の醸成

- 学習の自己管理システムの構築

(システムを使うことにより意識を醸成する)

- ・NBASシステムの構築
- ・リフレクションデザイン(NBASの使い方)科目

③ 高大接続問題 「前提とする学力」問題

- ・履修科目の選択制 (当然学んでこない科目がある)
- ・(履修していても) 学習成果の保証がない。
→ 自然系**共通**専門基礎科目の導入
人文社会系**共通**専門基礎科目の可能性の検討
工学部・農学部での単位外での補修授業

リメディアルという考え方で良いのかどうか？

④ マネージメントの教員が必要

流動化定員の活用(機構で4人：現状では不十分)

- 定員のさらなる確保には様々な困難
当該教員のキャリアパスが見えない
“専門職化”の弊害：：現場が見えない

⑤ 大学経営の課題 長期的視野に立った改革の継続性

- 執行部の交代に伴う経営の継続性
大学改革に与えられている時間は？